

アマテラスは月神だった

三浦 茂久さん



「伊勢は漁業の盛んな地ですが、今でも月読神社がたくさんあります」と話す三浦茂久さん＝東京・汐留の共同通信社

古代研究家

「アマテラスは太陽神である」と強引に教わってきたので、誰もそのことを疑う人がいなかったのだと思っています。

「アマテラスは日の神ではなく、実は月の神だった」という著書を次々に発表。その説は、「コペルニクス的転換」とも言われている。アマテラスが月神だとすれば、なるほどと理解できることも多い。

アマテラスより古い皇祖神にタカミムスビがいます。このタカミムスビも月神と考えられてきましたが、それも間違っていました。「日本書紀」の「顕宗紀」にはタカミムスビとは古い月神と書かれています。タカミムスビとは「高木神」の意味ですが、この高木神はケヤキのことだと考えられます。ケヤキの古代語はツキ(月)で、これは「月」の暗喩です。

アマテラスの「アマテル」は万葉集「では月の形容詞です。各地にある天照御魂神社も天照御魂の

日本の月信仰を追究

火明命が祭神ですが、この「ホアカリ」とはほのかな光のことで、これも日光のことではなく月光のことでしょう。

漁業は月明かりや潮の満ち引きにとっても関係が深い。夜の漁火を使うので、月が出ていると魚の集まりが悪く、月が沈んでから漁をするのが一般的です。また船を出すときは引き潮に乗り、港へ帰る時は満ち潮の時に帰るのが重要なんです。それらはみな、月が関係しています。

「漁網会社に勤めながら、古代の日本に興味を持って、本や資料を読み込んできた。会社をやめたのは56歳の時、それ以来、21年間、在野の研究者として古の月信仰を追究してきました」

会社では長期の海外勤務も多く、小説だとすぐ読め終わってしまう。そこで「日本書紀」「古事記」万葉集「などを手参して読んでいます。漁業と月の関係の深さを日常から知っていたので、古典を繰り返し読んでいたところ、月と日本の古代文化」について、関心が向いたのです。

独りよがりではないので「古代枕詞の究明」という本も書きました。枕詞はよく意味のわからないものが多い。もし古代の月信仰から説明できるとしたら、自分の考えが客観的に実証されると思ったのです。

例えば、「ス方のひかりのときき春の日にし心なく花のちるらむ」という百人一首で有名な紀友則の歌があります。これは「太陽の光のどかな春の日に桜の花が散っていく」という歌と思われてきました。でも歌集「古今六帖」には「ひかりの光さやけきほの日にし心なくはのちるらむ」という友則の歌が2回も載っていて、いずれも「のどけき」が「さやけき」とな

みづら・しげき 1934年愛知県豊川市生まれ。東京大出。神戸大学文学部。入道した論文が鎌田東一朗大教授から「古代史研究」にベルニクスの転換と高く評価される。著書に「古代日本の月信仰と再生意識」「古代枕詞の究明」など。

世界的にも月信仰は太陽信仰よりも古くから盛んだった。四方を海に囲まれた日本では古来、海人族の活躍が盛んで、月も太陽層でした。月には死と再生のイメージがあつて、月が信仰されていたのです。

それが、仏教が国教となっていく過程で、月信仰から太陽信仰へ変化していったのだと思います。光り輝く太陽光を発する仏像にならなくて、アマテラスも月神から日神になってしまった。それは文武天皇在位694年(707年)のころではないかと私は考えています。

聞き手・小山 鉄郎
写真・小堀美津子

くつろぎ
トラク

品に比べ高価で、手入れが大変」との声もあるが、江戸時代から続く鍛冶屋の出身、榎並正さん(50)は「きつとメンテナンスすれば、結局良い物が長持ちする」と強調する。

良質な包丁作り 生き残り図る



堺市堺区の工房で、窯から取り出した鉄板をハンマーで打つ堺打刃物職人の榎並正さん



堺打刃物(うちば)は、堺市やその近郊で発達した技術で製造される和包丁やさまざまな鉄板、室町時代、南蛮貿易で伝来した鉄砲の製造にも技術が生かされた。鋼鉄と軟鉄を鍛えさせてたたくことで分子密度が増し、優れた切れ味を持つ。プロの料理人の間では、9割以上のシェアを占められている。

で中心的な役割を果たした柳沢資氏さん(48)は「新瀬の三条並に比べ堺の刃物の注目度は低いが、今の世代を抱える職を呼んだ」と語る。

米国では線をカスパナーで代用。各会場特に盛り上がったのが、熱した鉄をたたきしんだという。柳沢さんは「さびる和包丁は米国で受け入れられにくい面があったが、小鍛冶会は良質という付加価値を示した」と手応えを語る。

「作るのを見て堺のほんまもんを知ってほしい」と語る榎並さん。20代の職人が出来なければと若手の登場を期待をかける。

400年超の歴史「堺打刃物」

関西
くろす
ミード

堺市堺区の薄暗い工房には、煮えたぎるような熱気が漂う。1500度のコークスが積まれた窯の中から取り出されたのは、オレンジ色に輝く細い鉄板。職人がハンマーで「カンカン」と打って引き延ばすと、板は次第に刃物の姿に近づいていく。

400年を超える歴史を持つ「堺打刃物」。鍛冶屋が1日に取り組めるのは、せいぜい15本という。大量生産の製